

第 23 回 紫波町まち・ひと・しごと創生推進協議会 要旨

○日 時：令和 6 年 12 月 26 日（月）14：30～15：40

○場 所：紫波町情報交流館 2 階 大スタジオ

○出席者

委 員：奥山智佳等、菊地圭二、須川禎尚、外川直美、富岡靖博、新田義修、早川博明、藤原博視、細川恵子、吉原武志

（勝部隆太郎、戸塚美奈子、武藤由子、横澤勤、八重嶋大樹は欠席）※敬称略

紫波町：内城生活部長、坂本健康福祉課長、谷地建設部長、吉田農政課長、佐々木環境課長、作山商工観光課副課長、三ヶ森地球温暖化対策課係長、葛教育部長、小川こども課長、須川生涯学習課長、中島学校教育課副課長、中野主任指導主事

事務局：鎌田企画総務部長、森川企画課長、金子総合政策係長、井上主事 計 26 人

全体の進行を森川企画課長、議事内容の説明は金子総合政策係長が行った。

1 開会（企画課長）

2 委員長挨拶

雪もなく年末らしくはないのですが、年末のお忙しいところ、お集まりいただきありがとうございます。今朝、通勤途中にテレビを見ていたら、「“4 時 10 分前”に待ち合わせをしましょう」と言ったら、何時に行きますか？という話題を取り上げていました。“4 時 10 分前”と言ったら、3 時 50 分ですね。多分我々の考え方だとそうなんでしょうけども、今の若い人は 4 時 5 分に行くんだそうです。「4 時の 10 分前ね」って言えば、3 時 50 分だし、「4 時 10 分の前ね」って言えば 4 時 10 分に間に合うように行けばいいし、というような話をしてみました。なるほどね、と思いました。

この総合戦略の中でも、自分たちが思っていることがもしかしたら相手に違うように伝わってしまうとか、誤解されてしまうということがあるかもしれません。年代によるギャップもあるのかなと思います。ですから、そのようなことにも気を使いながら、最終の仕上げをしていただければと思います。今日はどうぞよろしくお願いします。

3 議事（第 3 期紫波町まち・ひと・しごと創生総合戦略の素案について）

【質疑】

早 川 委 員：紫波町らしい戦略というものが、どの辺りに散りばめられてらっしゃるのか教えていただきたい。総合戦略の内容はどれも重要な課題だと思いますし、それに取り組む必要性も十分理解はできたんですけども、おそらくどの市町村でも当てはまるような気がしている。この総合戦略が人口減少対策のためということであれば、他の市町村にはない、より差別化を図るための魅力をつくるためにどんな戦略を一番の売りに行っているのかというところを教えてください。

企 画 課 長：紫波町といえば若い方々や町外からいらっしゃる方々に「新しいことにチャレンジを比較的しやすいまちだ」と言われてる。例えば、基本目標 4 の「民の活力が湧き上がり時代に合った地域が生まれる」という中で、「パブリックマインドを持った人材が生まれる土壌づくり」というところは、紫波町の特長の 1 つではないかと思っている。民間の方々の「地域をよくしたい」という思いや、自分たちが持っているノウハウなどを使って、地域を盛り上げ

ていきたいという方々が最近増えてきているように感じている。民間の方々や住民の皆さんと一緒に、地域を元気づけていきたいというところがまず1つめの特長である。

他にも、「ストックマネジメント推進」という部分でも、学校統合によって閉じた7つの小学校の利活用を民間事業者の様々なご意見を絡ませながら進めているというところも、紫波町の特長だと思っている。これらの、行政だけではなく、民間の方々と一緒になって進んでいくという取り組みや方針が、町独自のものだと考えている。

菊地委員長：素案の32ページに新しく「地域ビジョン」という表現が出てきた。「暮らし心地の良いまち、紫波町」というのは非常にすてきな言葉だと思うが、そこから急に基本目標といったものが出てくる。「暮らし心地の良いまち」とは一体なんなんだろうということを上手く表現できれば、その次の基本目標に繋がっていくように感じる。先ほど企画課長から話があったように、何かの活動に参画できることが、その人にとっての「暮らし心地の良いまち」かもしれないし、ある人にとっては、仲間ができることが「暮らし心地の良いまち」かもしれない。そういったような、「暮らし心地の良いまち」というものがどのようなものかイメージできるものを示すことで、基本目標に繋がりがやすくなるように思う。

企画課長：委員長のおっしゃる通りだと思う。一番は、その人が「こうありたい」と思うことが実現できている状態だと考えているが、理想とする状態は人それぞれ異なる。そういったいわゆる多様な考え方や望む姿が、それぞれ実現できているというのが、「暮らし心地の良いまち」だと町としては捉えている。委員長ご指摘のとおり、こんなイメージ、というものがもう少し具体的に伝わるような内容になるよう少し手を加えていきたい。

富岡副委員長：交通手段が整っていることも「暮らし心地の良いまち」につながると考えている。前回の会議で質問した際、デマンド型バスについて夜間の検証をやってみるという話だった。その結果は出たのか。

企画課長：11月1日から「ウイークエンドしわまる号」という名称で毎週金・土曜日に限定して、夜の7時から11時までしわまる号を1台運行している。12月21日までの実績が、利用回数は16回、利用者数は16名で、当初期待したよりは利用されていない。予約の受付方法をWEBのみにしているため、利用のハードルが高いのではないかとご意見をいただいているところだが、皆さんもご承知の通り、ドライバーやオペレーターをはじめとした人手不足もあり、WEB予約に限定しているという事情がある。

一方で、飲食店や利用者にまだ事業認知がされていないところもあるため役場も一緒になって、利用が促進されるように働きかけを行ってるところである。

利用者が想定を下回っていることについては、要因が予約のハードルが高いことなのか、そもそも夜の移動手段に関して需要がないものなのかというところまではまだ検証できていないが、このあとの実証実験期間の利用状況を踏まえながら、検証していきたい。

菊地委員長：やはり使いづらいという声を聞く。検証後、次に進める場合はそのような意見を聞いてほしい。飲食店だけの話だけではなく、例えば急に病院に行かなければならなくなったなどの様々なシーンで夜間に交通手段がない方に選択肢がないと、女性若者に選ばれるための印象が悪くなってしまうと思う。皆さんの意見に耳を傾けて、来年度以降考えていただきたい。

16回で16名の利用で、ならずと1回1人。利用料2000円。社会実験、実験検証的にやってみたという捉え方をすれば、それまでだけでも、これでは商売にならない。「暮らし心地の良いまち」になるために、起業する人が出てくる必要があるとすれば、商売が継続できなければ生活もできない。人手不足をはじめとした社会的な問題で、タクシー会社にしても人がいなくて、大変ということはあるかもしれないけれども、しわまる号にこだわらないで、その問題を解決するためにはどんなものが必要なんだろうか？というのを、本気になって考えて、こういうやり方であれば商売になるという考え方が必要なのではないか。もしかしたら役場ではなくて民間がやるということになるかもしれないけれども、地域の抱えている課題をもっと出しながら、民間にこんなことができて、銀行さんも融資してくれるかもしれないし…というような、上手に取り持ってくれるような形のものがあったもいいのかなと思った。

企画課長：おっしゃる通りで、夜のしわまる号だけでは、夜の交通手段をなかなか賄いきれない状況にある。皆様ご承知の通り、タクシー事業者さんが町内2社になり、ドライバーさん不足もなかなか回復せず、稼働していない車両もあり、どうにかドライバーさんを確保する策を考えなければならないと町としても考えている。

一方で、求人を出してもなかなか応募がない現状がある。そこで、首都圏などでも取り組んでいるような、一般の一種免許を持った住民の方が担うライドシェア等も前向きに考えていく必要があると事業者さんと情報交換をしているところ。事業者さんからすると、安全性の担保と経費の部分があり、悩ましいところと聞いてはいるものの、なんとか打開策を生み出していきたいと考えている。

吉原委員：いよいよ計画の大きな部分がまとまってきたなというように感じている。将来人口推計で、社会増減では社会増が続いていた紫波町においてもだんだん厳しくなってきたなかで、様々な施策を講じて、一定程度の人口規模を確保しつつ、活力ある暮らし心地の良いまちを作ろうという姿勢が表れていると拝見した。

社会減対策の一環になるかと思うが、関係人口の創出の施策はどのように取り組んでいくか、現時点でのお考えを聞きたい。

企画課長：基本目標2の「女性若者に選ばれて新しい人の流れが生まれる」の「2-4. 多様な主体との連携交流促進」という部分で、様々な企業や大学等との連携や交流を想定している。また、紫波町ではデジタル紫波町民等の取り組みにより、単に消費する交流人口だけではなく、長いスパンで関わっていただけの関係人口を増やしていきたいと思っている。

その他の施策のところでも同じような視点で取り組めると考えていて、冒頭の方で触れた、「4-2. パブリックマインドを持った人材が生まれる土壌づくり」という部分でも、紫波町に行けば自分の夢ややりたいことが叶うと感じてもらふことや、学校跡地活用事業のなかでも関係人口創出に結びついてくると思う。

人口減少の中で、より多くの方に紫波町に住んでもらうというのはもちろん第一として進めていくが、紫波町に住んでいなくても、遠く離れた場所で、例えばふるさとである紫波町を応援したいという気持ちや、全然縁がなくても面白いまちだから応援してみたいなという気持ちをきっかけに、さまざまな接点から応援してもらえるまちづくりを進めていきたいと考えている。

奥山委員：まず1点目、今回横断的目標として、「DX」という言葉が随所に入ったが、「DX」なのか「ICT」なのか「IoT」なのか明確にしたほうがよいのではと感じた。

2点目は、今回新たに追加になった「民俗芸能鑑賞事業の来場者数」というK P Iについて、追加した背景をお聞きしたい。

3点目として、計画の本体にも、新たに設定したK P Iなのか、継続のものなのか記載があるとわかりやすいように感じた。

企画課長：1点目と3点目について。「DX」「ICT」といった用語の整理はご指摘の通り、見直しを行う。また、K P Iの新規／継続の区分についても修正する。

生涯学習課長：2点目の民俗芸能鑑賞事業についてご説明する。背景として、民俗芸能の後継者の高齢化や後継者不足を各団体が課題として抱えている。民俗芸能や文化財は町の宣伝材料や観光の目玉になるもので、町の特色ある事業といえる。まずは鑑賞の機会を設けて町内外の方に知っていただきたい。また、団体の方々にとっても発表の機会があるということは活動の励みになる。情報発信や宣伝の部分でD Xを活用する方針でいる。

企画課長：補足するが、総合戦略の上位計画である総合計画の中に、暮らし心地の良いまちを実現するために重視していく地域資源というところで、「食・文化・スポーツ」を掲げている。そのため、歴史的なものや民俗芸能なども紫波町の資源であり強みということで、うまく地方創生に結びつけていこうという視点で捉えている。伝統芸能を鑑賞することで、新たな紫波町の良さを知ったり、活動や出演することによって紫波町での自分らしい暮らしの実現に結びついてほしいということで、掲げているものである。

菊地委員長：民俗芸能がたくさんあって、お披露目する機会を増やすという事業のK P Iは来場者数ではなくて、何回機会を創出できたかという指標にしたほうがわかりやすく、アクションを起こしやすいように感じる。その取り組みの中で来場者200人を目指したのに100人だったとして、開催場所や時期などのなにがまずかったのかを分析して、次につなげる。自分たちのアクションに繋がりやすい数値をK P Iに設定したほうがよいのではないかと。

営業活動をしている会社であれば、営業実績を伸ばすために、訪問件数や見積件数、提案件数をK P Iとして設定していて、当然訪問件数が増えると売上も上がるということが見える。自分のとった行動によって結果の数値が変わることが目に見えるように設計しないと、自分たちの行動でなかなか変えられない目標を設定しても全然意味がない。次に繋がって、自分たちの行動が評価として出てくるK P Iにしたほうがよい。

民俗芸能のK P Iを一つ事例にしたが、それ以外にもたくさんあるので、そんな観点で見ていくとよいのでは。

細川委員：「3-2. 子育てを社会全体で応援する環境づくり」に、「新たな子どもの居場所づくり」とあるが、これはどういうものなのか教えてほしい。先日、子ども子育て会議に出席したが、一番要望されてるのが、「子どもの遊び場所がない」というのが断トツで1位だった。居場所には子どもの遊び場という視点も想定しているのか聞きたい。

こども課長：前回の計画でもこの目標は設定していた。当時は学童といった、保育の部分を含めて強めに出して施設の整備を固めてきた。ご指摘のとおり、子どもの遊び場が求められていることは把握している。夏は暑く、冬は寒くて外では遊べないから、屋内の広い遊びが欲しいという意見も様々いただいている。ラ・フランス温泉の方でもそのような遊び場を整備する考えで進めているところだ

が、こども課の中でも子どもや親のニーズに応じた集える場所などを作り上げていきたいと思っている。広くて大きな施設を新たに建築するというのではなく、地域ごとに活動してる方もいるため、そういった方と協力しながら、既存の場所や施設を活用したいと考えている。

細川委員：ぜひ、地域ごとにでも検討を進めて欲しい。冒頭でも話題に上がったが、パブリックマインドを持ってる人が紫波町にはいると思う。福祉の分野でも交通／足がなくて買い物に行けないというような課題が出ている。何とか地域活動で車を出すようなことができないかと思う。助成金を出すというのは社協でもやっているが、パブリックマインドの視点をもって、行政だけでやるのではなく、民間や地域の活動を応援するような動きがたくさんあると嬉しい。

外川委員：「3-3. 未来社会を切り拓く資質・能力の育成」の「豊かな人間性・健やかな体の育成」の取り組みについて、学校教育の観点からお話したい。「教育心理検査の活用」を主な取り組みとして挙げているが、これは、Q・Uという学級集団の中でのルールとリレーションの度合いをはかるような心理検査のことである。学校現場では、今年度の高校1年生のあたりから、生徒の質ががらっと変わってきていると思っている。コロナを経てということもあるが、様々学ぶべきことを学ぶ機会を逸してきた学生が入学してきており、さまざまなルールについても、1から徹底し直さなければならないような状況になっている。紫波総合高校だけではなく、県内どこでも同じようなことが話題として出ている。

コロナでそれぞれの家庭での個々による活動が一気に増えてしまったために、集団の中で自分の居場所を見つけたり、集団の中での自分の立ち位置を見つけて力を発揮するということが、なかなか難しくなっているように感じている。コロナが明けて、今の小学生ぐらいから少しずつその集団の活動も戻ってきて、馴染んでくるのかもしれないが、スマートフォンなどの電子端末を各自自由に活用して、自分の好みや趣味趣向も細分化されているなかで、集団の中での自分の居場所に満足しているかどうかを1つの指標として見ていくのは、もしかしたら苦しくなってくるのではと思う。Q・Uそのものは学級集団のあり方とか学級経営だとか、学校現場での生徒指導の一助としては使い勝手がよく、とても役に立つものであるものの、町のビジョンとして、この指標を掲げるのは、それぞれの生徒の個性を伸ばしていくという視点から疑問に思う。

先週、盛岡広域振興局主催で企業説明会を2年生対象に実施した。今年は発表する企業以外に、見学をさせて欲しいという町外の企業が30社ぐらい来て、高校生の人材が枯渇しているのだなということを実感した。先ほど話題に上がった交流人口に通ずるが、基本的に紫波総合高校に在籍している生徒たちは、紫波町が大好きで、将来も紫波町に住みたいと思っているが、やはり卒業後就職するとなったときに、紫波町に住むということが難しくなってくるケースは多いと感じている。今の高校生たちが働いて、子育てをするようになってきた頃のビジョンだと思うので、ぜひ今の高校生たちが、これだったら紫波町やっぱいいなと思うようなビジョンになるとよいと改めて思った。

主任指導主事：前半部分の、指標についてお話ししたい。確かに、現在の教育の中では、個別最適化、一人ひとりにあった教育学習が叫ばれており、多様性も大事にされているところだが、そのなかでも決して忘れてはいけないところに協働性

があると考えている。個が育つことで集団が育ち、集団が育つことで個が育つと言える。A Iに囲まれた社会の中で、子どもたちが自分たちの人間としての良さを発揮することができる「生きる力」を育むことが学校教育とも言える。以上のことから、紫波町では一人一人の力と個性を尊重するとともに、集団の中で他者と関わりながらどのように生きていくかという、人間としてこれから社会の中で求められる部分を、教育として大事にしていきたいと考えているため、今回の指標を設定した。

藤原委員：2点、お願いがある。例えばで申し上げるが、素案本体の40～41ページ「1－3. 中小企業の成長と地域経済の発展を支援」と、基本施策の考え方を3月議会に上程すると思うが、中小企業振興条例の策定を契機として書いているもの。非常にいいこと。K P Iを見ると、主な取組・事業の(3)と(4)が設定されている。(1)と(2)は、難しくてK P Iを設定できなかったかもしれないが、この部分に限らず、基本施策の考え方や、取り組み事業を見ながら、適切なK P Iとなっているか今一度見直していただきたい。ただし、首を絞めるようなK P Iとならないよう留意してほしい。もう1点だが、総合戦略の全体と、各種計画との整合がとれているかどうかを確認してほしい。55ページに待機児童数がK P Iとして記載されている。ずっとゼロである。このような指標がある中で、各種計画がどういうふうになっているのか。改めて年明けのパブリックコメント期間中に、本当に適切な指標になっているかという視点で、各部課長によりもう一度再確認してもらいたい。

菊地委員長：それぞれのK P Iの先に、「暮らし心地の良いまち紫波町」がきちんと繋がっているかという点と、自分たちの行動によって改善する指標になっているかどうかという点を頭に置きながら、頑張っていたきたい。

企画総務部長：素案本体の27ページをご覧ください。今回議題に上がった委員長のご指摘や子どもの居場所、なぜ歴史を総合戦略に入れるのか、紫波総合高生が地元で定着するために、しわまる号・夜間のタクシーについて、いずれも悪循環と好循環の図が共通していると感じている。自分自身がそうだが、地方創生の取り組みのなかで、関係人口や企業誘致とか、外から連れてくるという視点を持っていたが、好循環の図を見ると、皆さんにもご発言いただいた「町で活躍する若者が増える」「面白い町になっていく」という地元にいる人たちを大切にしないといけないという視点を入れてこそその「暮らし心地の良いまち」だろうと感じた。

先ほど歴史をなぜ追加したかというご質問もあったが、伝統芸能に関わる若者がいて、その活動が愛着に繋がって、紫波町に住み続けたいという流出抑止につながり、悪循環を生まないためにも重要と思っている。基本施策の考え方についても、この視点を入れて、文章でわかりやすくすることによって、早川委員の言う紫波町の特色に繋がると感じたため、その方向で修正したい。

4 その他
特になし

5 閉会（企画課長）